

猪又 厚子・『廃村になった分校のささやかな修復と今自分が出来る人と自然の関わりに関する研究』

内山 伸一・『糸魚川能生地区に於ける地すべりの歴史とジオパークの防災意識向上に関する研究』

木嶋照男・『新潟県西部浦本地区に於ける方言の伝承とフィールドに関する研究』

倉又 登美子・『糸魚川の民話に於ける子供たちへの風土継承に関する研究』

小林 峯登・『月不見の池誕生と観光資源としての周辺域に於けるジオパーク的な価値に関する研究』

瀬下 忠彦・『陸の孤島というジオパークの50年後交通インフラによる都市形成に関する研究』

竹内慎治・『ジオトープづくりによる環境教育の推進』

平野 悟・『糸魚川ジオサイトマイコミ平に於けるジオツーリズムの展開に関する研究』

松嶋 洋子・『糸魚川ジオパーク浦本地区に於ける観光と漁業に関する伝統的生活と工芸の研究』

松澤 克矢『糸魚川地域をプロトモデルとした守る農地と変える農地、双方向からの活性化に関する研究』
～糸魚川について“守る”と“変える”を考える研究～

山本 かずみ・『里山の活用と可能性に関する研究』

～ムーミン谷構想～

『廃村になった分校のささやかな修復と今自分が出来る人と自然の関わりに関する研究』

"The Study of a landscape in small school in a mountain village "

猪又 厚子 (Atsuko-Inomata)

概要・・・人と自然の関わりや、自然力との共存をテーマにジオパークを考えたとき、新潟県糸魚川市には失われつつある原風景が希少な空間構成として残っている事を、以下の文章から「原風景の抒情」における存在と考えられる。『糸魚川世界ジオパークとして24のジオサイト。今井、不動滝もジオサイトの一つです。その滝はとても偉大でさぞかし大勢の人が訪れるだろうと考えられます。そしてまた、塩の道西側ルートという事で一年に一回は必ず廃村に成った菅沼部落【注視・「部落」との表記については東北および北陸地域等の一般的な方言や表現であり、地域の誇りと愛着をかねた呼び名であり、一部地域の差別的な用語では無く、意味合いの違う日本の文化形態である(金田一京助による国語辞典においても動議の内容が記されている)為、本文に於いて地域表現文化として用いる】を団体の方々が歩いて行かれるそうです。しかし菅沼部落が廃村となり、だんだんと草、雑木で荒れて行き、そのせいか少しずつ本来のルートから外れて歩いてゆくようになりました。それはこれから先、歴史を変える事に成ります。側には廃校に成った分校も有ります。嘗て自分が学んだ分校で当時まだ多くの人が在住しており、活気で満ちていました。不動滝＝菅沼＝分校 これは自分に取って仕切っても切り離せないサイトなのです。少しずつ復活、かつて昔、不動滝だけではなく菅沼分校が有ったという歴史を存続させたいと思います。最後にカレッジの主旨と違っているかもしれませんが取りあえず今、自分のしている「ささやかなボランティア」をテーマにしてみました。』従って本研究は糸魚川地域に於ける原風景や希少空間に対する著者自身の活動体験から、ボランティアとしての視点で自然や人文に対しての保全と活用に対する有り方の一考を本論文として進める。

『糸魚川能生地区に於ける地すべりの歴史とジオパークの防災意識向上に関する研究』

"History of a landslide in Itoigawa-cityNou-area and research work about protection against disasters conscious improvement of Geopark "

内山 伸一 (Shinichi-Uchiyama)

概要・・・本研究は1947年西頸城郡能生谷村柵口地内の地すべり発生から地すべり災害の歴史をたどり、防災の意識の向上を願い研究を進めた。糸魚川ジオパークに於いては、その地形の複雑さと、山川海をひとつの市内に持っている特質が在る。又、旧西頸城地域は西浜七谷と呼ばれる中の5つの谷を糸魚川地域が持ち、独自の形状から、それぞれの文化が自然の恵みと災害の中から育まれて来た歴史が在る。このような糸魚川の特質は東日本大震災復興時に於いて東北の各地域で地域活性や都市再生の参考となり、実際に糸魚川の優れた土木技術を学びたいという方達が糸魚川地域に訪れ、農林水産・住宅地・商業地の自然共存思想・地域観光に於けるおもてなし・水資源活用までを糸魚川から提供できた。こうした中で、これら提供の根源ともなる糸魚川ジオパークの持つ台地と水の関係に在ると考え地形や地質と風土について、今回能生地区を題材に史実的検証を行い、糸魚川ジオパークの顔として防災意識の向上について研究を行った。

『新潟県西部浦本地区に於ける方言の伝承とフィールドに関する研究』

"A study on the lore and fields in dialect in Niigata Prefecture, western Uramoto district"

木嶋照男 (Teruo - Kijima)

概要・・・新潟県の最西端にある糸魚川市は、フォッサマグナの影響によって特有の地形を有した山海の自然あふれる地域である。3000m級の北アルプス群を背景に頸城七谷と呼ばれる内、五谷が折り重なり、日本海特有の気候や対馬海流等の潮流によって、山々の自然形態が形成されている。そこに住む人々の営みは古く、各谷合独自の文化は縄文の昔より培われてきた。一つの地域の中に多様な文化を有しているという希少性から、2009年に世界ジオパークに認定されている。一方21世紀になり、過剰な情報網とグローバル化の波がおしよせ、古くから培われてきた各地域の個性は失われつつある。歴史ある文化が、またたくまに破壊されて行く現状に嘆かわしさを感ぜられる。本研究では、谷合の community において使用されてきた独自の言葉に着眼し、その言葉の普及形態を調べることで、方言と地区の関係を明らかにすることを目的とした。市内の浦本地区をプロトモデルとし、現在に残る浦本地区の方言を題材に、市内の4地区と異なる年代の方を対象に比較考査を行い、日本独自の地形の中にある言語と地域文化の関係を明らかにした。

『糸魚川の民話に於ける子供たちへの風土継承に関する研究』

"The community study which is told by the folk tale presented to children in Itoigawa"

倉又 登美子 (Tomiko-Kuramata)

概要・・・映像メディアの中で育っている今の子供たちにとって、シンプルな語りだけの糸魚川民話が子供たちの中にどのように入り、どのように継承されていくのか、糸魚川の豊かな自然と文化が、どのような言語や心象風景で認識されていくのか子供たちのアンケートを通して解析を試みる。

『月不見の池誕生と観光資源としての周辺域に於けるジオパーク的な価値に関する研究』

"Sightseeing study of Itoigawa Geopark about birth of "pond in Tsukimizu" and ambient surroundings"

小林 峯登 (Mineto-Kobayashi)

概要・・・2009年、世界ジオパーク国内一号となった新潟県糸魚川市早川郷に在る『月不見の池』は、巨岩に囲まれ周りとは隔絶したようなところである。

大地の公園であるジオパークの中でも、この巨岩がなぜここだけにあるのか興味を持ったことから本研究が始まった。また、この巨大石群から成り立つ『月不見の池』が、守られることと同時に地域の観光資源としてさらに多くの人たちに知ってもらい訪れてもらいたいと思い、ここにその成り立ち・現状・保護手法・活用手法の考察を進めることで、研究論文として纏めた。

『陸の孤島というジオパークの50年後交通インフラによる都市形成に関する研究』

"City formation study of Geopark and traffic infrastructure "

瀬下 忠彦 (Tadahiko-Seshimo)

概要・・・日本は戦後より経済立国として国際社会に地位を確立している。その一つの背景には、全国総合開発計画（以下、一全総）によって国土の基盤づくりが行われ、それに伴い基幹産業や付随する産業が大いに発展したことが挙げられる。経済の発展は、国民の所得向上をもたらし、一億総中流からモータリゼーションなど国民生活の文化的側面も飛躍的に変化を遂げた。一全総から約50年が経ち、21世紀の国土のランドデザインへ移行する中で、地方創生というような、より地方の自立や地域間連携が注目されつつある。研究対象の新潟県糸魚川市は、古来より東西を繋ぐ交通の要衝でありながら、地理的特有さから交通の難所として認知されており、いつしか「陸の孤島」という俗称で呼ばれることもあった。しかし、交通難所だったとはいえ近隣地域と糸魚川圏の人々の交流もたしかに存在したはずである。今日では、「陸の孤島」から脱却したであろう人々の行き交いが存在していると考えられる。今現在の各地方自治体においては、居住者の生活、特に休日の余暇活動の様子が表出する機会は少ない。これからの少子高齢化社会に備えるうえで、どのようなライフスタイルがおくられているか、またどのようなライフスタイルが可能な郷であるかは、移住を選択する際のキーポイントになるだろう。また今現在の地域居住者の休日・余暇活動を明らかにすることは、その地域ごとでのライフスタイルを垣間見るだけではなく、交通インフラに着目することによって双方向的な交流を見出し、近隣諸地域にとって糸魚川はどのような地方都市であるかを考察できるのではないかと考えた。

『ジオトープづくりによる環境教育の推進』

"The promotion of the environmental education by the making of geotope"

竹内慎治 (Takeuchi Shinji)

要旨・・・本研究の目的は糸魚川世界ジオパークの中にある青海地区（新潟県糸魚川市）の自然の保全と子どもたちへの環境教育にある。本研究は、地域の地質や生態系に配慮しながらジオトープ（地形・地質を中心に考えた自然な生態系を構成する空間）を造成し、児童生徒の地域の自然への理解を深め、自然の保全への意識を高めることにより、将来のジオパーク活動推進を担う人材育成につなげていく取組である。今年度は、昨年度立てた計画に基づき、ジオトープづくりを実施した。

『糸魚川ジオサイトマイコミ平に於けるジオツーリズムの展開に関する研究』

" The study of Geo-Tourism in ItoigawaGeosite "Maikomidaira"

平野 悟 (Satoru-Hirano)

概要・・・本研究は世界ジオパークの街である新潟県糸魚川市をプロトモデルとして、糸魚川ジオサイトの一つである『マイコミ平』を事例にジオツーリズムをどの様に展開して行くことが良いのか、手法を検討する目的がある。その為に本研究では、30年以上の実績のあるエコツーリズムを調査し、ジオツーリズムとの違いを明確にした上で、共通する部分を参考にジオツーリズムを効果的に展開してゆく手法について検討した。マイコミ平におけるジオツーリズムについては保護と活用・観光・教育の分野において考察を行い、人々の自然に対する取り組み方について提言を行った。

『糸魚川ジオパーク浦本地区に於ける観光と漁業に関する伝統的生活と工芸の研究』

"Sightseeing, fisheries industry, traditional life and study about arts and crafts in ItoigawaGeoparkUramoto area. "

松嶋 洋子 (Youko-Matushima)

概要・・・新潟県糸魚川市の観光において、甘エビ、紅ズワイガニ、アンコウ、を特産品としてPRしている。漁業は体験学習が困難なためか地元の人でも漁法や漁場の様子を知らない。新幹線の糸魚川駅で日本海ひすいライン直江津行きに乗り換えて2つ目の駅、「浦本」で下車すると目の前は海である。ここはかつて漁業の盛んな地区であった。浦本の沖合はカンザシタラ場と呼ばれている良好な漁場があり漁獲高は新潟県下でもトップクラスで有った。現在の浦本駅前の海岸は、侵食され砂浜が無くなり、ここで漁業が営まれていたとは想像もつかない。浦本駅から500mほど西に浦本漁港に隣接して『さわやか広場』がある。ここでは磯観察ができる。本研究はこの『さわやか広場』を、漁業や海の学習ができるエリアに整備し、更に刺し網に掛かってきた貝やサンゴで作った海底の模型、漁具等を糸魚川駅に近いところに展示することにより、日本海に一番近い新幹線駅（糸魚川駅）のイメージアップを図る研究を行った。

『糸魚川地域をプロトモデルとした守る農地と変える農地、双方向からの活性化に関する研究』

糸魚川について“守る”と“変える”を考える研究

" Study of "inherited agriculture" and "the agriculture which changes" in Itoigawa area"

松澤 克矢 (Katuya-Matuzawa)

概要・・・失ってはいけない眺めがある。壊してはならない眺めがある。再生しなければならない眺めがある。新潟県糸魚川市西海地区にかつては農業が営まれたが、今現在担い手がいなくなり、荒れ果てた状態になっている田園風景がある。農家の高齢化、後継者不足が叫ばれる昨今において、それは我や糸魚川市においても、例外なく由々しき問題である。今後あと5年後、10年後の糸魚川地域の田園風景や、生まれた頃から目にしてきた当たり前の光景が今まさに危機を迎えている。そんな現状を何とか変えたい！変えなくてはならない！そんな思いからこの度、本論文を執筆した次第である。

『里山の活用と可能性に関する研究』

～ムーミン谷構想～

"The Muumi Valley plan "Possibility study of Satoyama utilization

山本 かずみ (Kazumi-Yamamoto)

概要・・・2013年度の糸魚川ジオパークカレッジに於ける研究では「里山と生きがい」について考察を重ねてみたが、今後益々高齢化を迎えるであろう現代社会において、人々がすこやかに、安全に、豊かに生きることのできる環境づくりと、常に地域資源にある「里山の活用と可能性」について視点を当てて再考を重ねる。

